

NEWSLETTER

編集・発行 日本催眠医学心理学会

No.72 2021. 10. 15

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5

(株)国際文献社

TEL: 03-6824-9370

第66回オンライン大会を終えて

大会長 小泉晋一 (共栄大学)

日本催眠医学心理学会第66回オンライン大会はZoomを利用した初めての試みでしたので、参加人数の予想がまったくできませんでした。大きな賭けをするような心持ちで臨んだのですが、結果的には多数の方にご参加いただいて盛況のうちに終えることができました。具体的には、催眠技法研修会に58人（正会員は20人）、学術大会に93人（正会員は55人）の申し込みがありました。非会員の方が予想外に多く、大勢の方にご参加いただきましたことに篤く御礼を申し上げます。

オンライン大会はまだ誰も経験していないことなので、どのようなトラブルに見舞われるのかが充分に予測することができず、いろいろと不安要素があったのですが、幸い致命的なトラブルが起きることがなく、三日間の大会を無事に終えることができました。これも会員の皆さま一人ひとりのご協力をいただきましたことと、大会実行委員の皆さまに暗中模索のなかでも共に力を合わせて協力し合い、多大なご助力をいただきましたことの賜であると心から感謝しております。

今後もオンラインによる大会が開催されないとは限りませんので、参考のために失敗した点や注意すべき点をいくつかお伝えします。まず主催者側の音響設備が非常に重要になります。会期中は大会実行委員間でZoomのホスト、出席者の確認係、質問の受け付け係などに役割分担をしました。大きめの部屋（教室）でホストとなるパソコン1台に加えて、複数のパソコンを同時に起動させたのですが、複数のパソコンの音声機能をオンにするとかなり激しいハウリングが生じてしまいました。参加者の皆さまにはかなり聞き苦しい思いをさせてしまったのではないかと思います。主催者側は必ず全員がヘッドホンを用意する必要があることを実感しました。

また催眠技法研修会のときに、パソコン画面上の動きが停止してしまうというハプニングに見舞われました。これは研修会の進行上Zoom Meetingの録画機能をいったん停止する必要があったのですが、停止した録画をパソコンが保存するとパソコンの容量に多大な負荷をかけ、パソコンの動作が遅くなったために生じたトラブルでした。この録画を保存するのにも時間がかかり、一時的に休憩時間を挿むことで急場を凌ぐことになりました。この時間のロスによって、貴重な研修時間が削られてしまいましたことについては、参加者の皆さまにお詫びを申し上げます。

うまくいったこととしては懇親会があげられます。懇親会ではZoom Meetingのブレイクアウトセッションの機能を使って、参加者を4部屋に分けて小グループでの懇談の時間をもうけました。懇談の時間は20分間ほどです。時間が来たら参加者をランダムに振り分けて、別のメンバーで懇談をします。これを時間がくるまで繰り返したのですが、今までの大会の懇親会とは違った体験ができてたいへん新鮮でした。普通の懇親会ですと、話をする相手も旧知の間柄の人に限られがちになりますが、Zoomのブレイクアウトセッションを利用しますと、通常の懇親会では話をしないようなまったく面識のない人とも話することになり、いろいろな人と出会うことができます。そして、今までに知らなかったようないろいろな情報を得ることができました。

最後になりますが、シンポジウムや教育講演で登壇していただいた先生方にお礼を申し上げます。大会のテーマを「催眠の可能性」としましたが、どの先生方にもこれからの催眠の発展につながるような大会テーマに合った素晴らしい話題を提供していただきました。本大会を開催してみて、学術大会や催眠技法研修会がオンラインによっても可能であることがよくわかりました。これを機に、日本の催眠研究と臨床催眠とがますます発展し、催眠の可能性が今後も拡がり続けることを願っています。

第66回大会に参加して

立石紀昭（田川療養所）

私は立命館大学の斎藤稔正先生が大会長をされた第50回大会以降、ほぼ毎年この学会の大会に参加しています。シンポジウムや症例検討で新しい知識を学び、私にとっては刺激的で本当に有意義な学会です。最終日の終了1時間前に、帰りの便のために退席しなければならないのが、残念でたまらないほどです。

今回のオンライン大会についての感想ですが、大会参加の目的を①新しい知識の習得、②会員間の交流、③観光という人もいます。③の目的は、大会の前後に時間が取れると最高ですが、大会の本来の目的からは必要ない方が大部分でしょうから、検討に値しないも等しいことですが、オンライン大会のマイナス10点というところでしょうか。②の目的は私にとっては大きなウエイトをめています。毎回の大会で旧知の間柄になった先生方にお会いして、歓談でき、また憧れの高名な先生方の顔を拝見し、学会でのコメントをお聞きするのが楽しみです。オンライン大会ではこの目的は全く達成できませんでした。

また、この学会の私にとっての最大の魅力は実技研修

です。今回も初級コースはズームを使ってなされましたが、中級以上は当然ありませんでした。最近は毎回中級コースを受けていました。普段臨床で催眠を使う機会がなく、年に1回の学会での実技研修が唯一、催眠にかかわる機会です。少しは慣れてきたといったところに、また新しい技法を教わり、本当に有意義な学会となりました。この中級コース以上の実技研修がない今回のオンライン大会は、私にとっては残念と言っても過言ではないと思います。これから派生して、学会の認定の資格についてのシンポジウムがありました。この学会には指導催眠士の認定制度がありますが、学会の認定催眠士といった養成コースといったものがあればいいなと思います。私のような学会だけで催眠療法を学んでいるものにとって、自信がつくまでにはいけないというのが悩みです。

以上が未熟な私のオンライン大会に関する感想ですが、本当に偏った意見だと思います。参加者のほかの多くの意見を聞いていただければ幸いです。

このような不便な環境で大会を、準備、開催していただいた大会長、小泉晋一先生、周りの方々、本当にありがとうございました。早くコロナ禍が終息して、皆さんとお会いできる日を楽しみにしています。



理事長・各委員会委員長からの挨拶とお知らせ

《理事長》

日本催眠医学心理学会の新しいパラダイムの構築に向けて

理事長 飯森洋史（飯森クリニック）

今回、理事長に再選されました。前回新理事長に選出された際に挨拶文に掲げた課題について、実現できた課題、実現できなかった課題、新たに生じた課題としてホームページに記しました。

その後、時代は流れ、様々な出来事が起こりました。その筆頭に挙げられるのが、成瀬悟策先生がご逝去されたことです。長年、本学会を率いてこられた名誉理事長を失ったことは、新たな時代の到来を意味します。以前のようなマスターセラピストが群雄割拠していた時代は終わりました。今後の進むべき方向について、過去に学び、諸外国に学び、みんなで力を合わせて模索していかなければなりません。

次に、COVID-19の終息が長引き、以前と同じように大会や研修会が開催出来なくなったことです。その中であって、思い切ってZOOM開催を断行したところ、予想外に大成功に終わりました。困難にもめげず、新しい可能性にチャレンジすることの大切さを学び、臨床にもつながる教訓と思わぬ示唆を受けました。今年度も、立命館大学で大会がZOOM開催される予定です。大成功に終わるよう、会員の皆様の積極的なご参加をよろしくお願い致します。

さて、前回実現できなかった課題や新たに生じた課題についてですが、資格制度の改革については新資格委員長の下で見直しが進行しています。学会誌発行も、成瀬悟策先生特集号を始め、次々と刊行される予定です。早期の正常化が期待されます。研修会についても、海外講師によるZOOM開催がどれだけ実現が可能か検討中です。新倫理委員長のご尽力により倫理綱領や裁定委員会細則がホームページに掲載されました。会則改定問題についても、新会則改訂検討委員長の下で、各条文の見直しが一歩一歩行われています。国際学会への参加も前回の大会のように、より多くの会員の積極的な参加が望まれます。

以上、課題は山積みですが、一つ一つ地道に努力して、催眠を楽しんで学べる、催眠について語り合える魅力ある学会となるための環境作りをしたいと思います。その上で、会員の皆様の学会への積極的なご参加と日常の催眠実践を通じて、会員みんなで学会の方向性を見いだせたらと願って止みません。

《編集委員会》

投稿論文をお待ちしております。催眠学研究59巻が刊行し発刊を続けたいです

委員長 長谷川明弘（東洋英和女学院大学）

引き続き、今期も「催眠学研究」の編集に携わることになりました。今回で三期目となります。今期は、編集委員会内で担当体制を持つ方針にしました。編集委員には、査読に加えて巻毎の編集責任や書評などをご担当して頂く形を取りました。

最新巻は59巻が2021年9月半ばに皆様のお手元に届いていたと思います。59巻は、本学会の実質的な創設者であり、国内外で催眠学、臨床心理学を牽引されてこられた成瀬悟策先生の追悼企画号です。催眠学研究に掲載された成瀬先生を筆頭とする論文や企画論文に加えて成瀬先生、高石昇先生と河野良和先生とで交わされた誌上討論の論文が掲載されています。現在は、続く「60・61巻合併号」を2021年度中に発刊できるよう準備を進めており、併せて表紙デザインを刷新する予定です。その後「62・63巻合併号」「64巻」と続けて刊行していくことで、発行遅延を解消していく計画です。現在、企画論文を中心に編集構成が決められています。

催眠に関する研究論文（事例研究、実験・調査研究）について、会員各位から投稿をお待ちしております。日々の専門活動を論文として系統的にまとめることで臨床技能の向上だけでなく催眠学にも貢献できます。投稿原稿到着から査読結果の通知まで3ヶ月程度（可能ならばさらに早く）で進めて頂くように査読を依頼しております。

投稿先は、末尾の編集局連絡先に郵便などでご送付願いたく思います。電子メールを介した電子媒体での投稿をご希望の場合は、予め編集局までお知らせください。電子投稿について前向きに対応を致します（継続して試験的に電子投稿を受け付けております）。

なお今期の編集委員はアルファベット順（敬称略）で、安達友紀（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）、藤岡孝志（日本社会事業大学）、小泉晋一（共栄大学）、窪田文字（医療創生大学）、宮下敏恵（上越教育大学）、齋藤稔正（立命館大学）、齋藤雅英（日本体育大学）、清水貴裕（東北学院大学）、鈴木常元（駒澤大学）、田村英恵（立正大学）、上地明彦（関西外国語大学）となっております。どうか宜しく願います。

投稿先は、編集局連絡先にご送付願いたく思います。

【編集局連絡先】

〒226-0015 神奈川県横浜市緑区三保町32

東洋英和女学院大学 人間科学部
「催眠学研究」編集局 長谷川 明弘
電話；研究室直通：045-922-7729
電子メール；hasegw_a@toyoeiwa.ac.jp
大学代表番号：045-922-5511 (代表) FAX：045-922-2260 (共通のため氏名明記)

《広報委員会》

学会の活性化の一助に

委員長 井上忠典 (東京成徳大学)

広報委員長を務めさせていただいている井上です。この学会の広報の仕事は、20年くらい前に故森山敏文先生が広報委員長をされた時に委員に加えていただき、会報の編集を担当させていただきました。その頃は、まだ若手の会員に過ぎず、学会の活動に加えていただき、ありがたく感じながら仕事をさせていただいたことを覚えています。その後、学会の中でいろいろな仕事をさせていただきましたが、このたび学会広報の仕事をお任せいただきましたので、初心にかえって広報の仕事に取り組みたいと思います。

現在の委員会の主な仕事は、会報 (ニューズレター) の発行とホームページの管理運営です。ひと昔前までは、会報が会員の皆様との重要なコミュニケーションツールでしたが、今ではホームページにその役割の比重が移りました。情報量も即時性も圧倒的に優れているため、当然の移り変わりかと思えます。紙媒体の文字文化に慣れ親しんだ者にとってはさみしい変化かも知れませんが、時代の流れには逆らえません。会報を残しながらも、ホームページを充実させ、利用しやすいものにしていくことが与えられた役割と考えています。

広報の仕事としては、上記の会員に向けた学会活動に関する情報の伝達は重要な事項ですし、ホームページを通じて会員同士の情報交換などが行えると、学会の活動の活性化につながるのではないかと考えています。もう一つの仕事ですが、会員以外の一般の人々に向けた催眠・催眠研究・催眠臨床についての情報発信も大切な役割ではないかと考えています。催眠については、マスメディアの影響もあって、とかく奇異な面ばかりが強調されて伝わり、偏った見方がされがちです。催眠現象の面白さや臨床で催眠を使うことの有用性など、催眠についての正しい知識やイメージの普及につながるような情報発信を行いたいと考えています。会員の皆様のお力もお借りしながらすすめていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

《企画・教育委員会》

催眠技法研修会の報告と今後の抱負

委員長 小泉晋一 (共栄大学)

まず2020年11月27日 (金) に開催したZoomによる催眠技法研修会の報告をいたします。このときの研修会はオンラインで実施しましたが、オンラインだと催眠の実技実習ができなくなりますので中級コースと上級コースは設けずに初級コースだけを用意して、実技実習の代わりに催眠誘導のデモンストレーションを見てもらいました。参加者は57人でしたが、正会員21人に対して非会員が36人と非会員の方が多く参加しました。研修会の後にアンケートには「催眠に懐疑的であったが、Zoomかつ低価格だったから心理的ハードルが下がり参加することができた」という内容の記述がみられました。Zoomだと自宅で気軽に参加できるという利点があるので、催眠を広く普及させることを考えると、初心者を対象にオンラインを活用した催眠の研修会を今後も開催し続けていくことが重要だと思いました。

研修会後のアンケートでは、「不満」から「満足」までの5段階評定でほとんどの参加者が「満足」か「やや満足」に丸を付けていましたが、普段よりも「普通」と「やや不満」と評定した人が多かった印象ももちました。その原因としては、音響のハウリングがたびたび起きたこと、機材のトラブルで研修会が中断したこと、デモンストレーションの音声がかえづらかったことなどの研修会そのものの内容ではなく、オンラインの環境や技術的な問題に起因することがアンケートの自由記述からわかりました。これらの不備は、我々開催者にオンライン (Zoom) に対するリテラシーがまだ十分に備わっていなかったために起きたことでもあり、これらのご指摘は教訓として今後の研修会に活かしていきたいと考えています。

オンライン研修会については、「地方なので催眠を勉強する機会がほとんどないので、今後Zoomによる研修を継続して」ほしいという内容の要望もありました。未経験者にとってはオンラインの方が参加の敷居が低くなるようなので、催眠のことを多くの人に知ってもらうためにも、オンライン研修会 (初級コース) を今後も開催することの可能性を検討する余地が充分にあると考えています。今後の研修会について、もしもご要望がありましたらメール等でご連絡いただけましたら幸いです。

《倫理委員会》

倫理委員会からのお知らせ

委員長 加納友子 (立命館大学)

平素は本委員会の活動にご協力賜りまして、誠にありがとうございます。2017年度に倫理委員に着任させていただき、昨年度倫理委員長を拝命しました立命館大学文学部の加納でございます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

さて、本学会では1990年7月に「日本催眠医学心理学会倫理綱領」が制定されましたが、その後「倫理規程」の制定が長年の課題となっております。また、会員の倫理に関する疑義や、本会が定める倫理綱領の遵守に問題が発生した場合の審議委員会の設置に関しても検討が必要とされておりました。さらに、昨今、研究者の倫理観欠如によって生じた問題が数多く報道されるようになり、本学会理事会でも倫理関連規程の制定が強く求められていました。

そこで、本委員会では、2018年度より前倫理委員長の鶴光代先生のもと、「倫理規程」に加え「裁定審議会規程」「裁定審議規則」の作成に取り掛かることになりました。そして、委員会における原案作成と、理事会・常任理事会における度重なる議論を経て、2020年11月の学会の年次総会において、それらの内容についてのご承認を得ることができました。これらの規程と規則は、現在学会ホームページからご覧いただけますので、是非ともご確認ください。

会員による倫理規程違反の疑義があった場合の対応方法と連絡先につきましても、ホームページに掲載しております。こちらは「倫理要綱及び規程」>「倫理規程」>「裁定審議会からのお知らせ」をご覧ください。万一、倫理規程違反に関する通告があった場合には委員会として速やかに対応いたします。

しかしながら、このような問題は生じないに越したことはございません。今後は催眠利用の倫理に関する啓蒙活動も行なっていければと考えております。

最後になりましたが、本規程の制定にご尽力くださいました鶴先生をはじめ、ご協力いただきました諸先生に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

《国際交流委員会》

国際交流委員会委員長に就任して

委員長 藤岡孝志 (日本社会事業大学)

今期から国際交流委員会委員長に就任いたしました。よろしくお願いたします。

国際交流委員会の役割は多岐にわたり、また、海外の研究・臨床の動向を踏まえ、日本における催眠研究及び催眠臨床の発展の一翼を担う重要な委員会と認識しています。これまでも前委員長の松木繁先生のご尽力で、学会誌に海外の催眠論文を翻訳要約し掲載されるなど、会員の皆様に海外の催眠研究の動向を提供していただけてきました。また、国際大会のご案内も折にふれてされ、前回の第21回国際催眠学会モンリオール大会には日本からは10名の参加者がありました。今後も、これらの委員会活動内容を継続していく所存です。加えて、コロナ禍の厳しい状況下、海外渡航あるいは来日いただいているの対面による交流が難しくなっている現況を考慮すると、Zoom等オンラインによる海外の研究者・臨床者との交流も今後ますます重要となってくるものと考えております。コロナ禍後の新しい日常としての国際交流のあり方も模索していく所存です。会員の皆様のご意見をうかがいすることができれば幸いです。

さて、COVID-19パンデミックの影響により、今年開催予定であった国際催眠学会 (the International Society of Hypnosis: ISH) 第22回国際会議ポーランド・クラクフ大会の開催が来年2022年6月8日から6月11日までに延期されました。会議前のワークショップも2022年6月7日に予定されています。クラクフ大会の開催要項や参加申し込み、研究発表申し込みの方法については、以下の大会ホームページで見ることができます。参加ご希望で、まだ申し込みをされていない方は、以下のURLからお入りいただき、国際会議参加登録等できます。

<https://www.ishhypnosis.org/krakow-2022/>

前は、冒頭ご紹介いたしましたように、2018年10月にカナダ・モンリオールで開催されました。ポーランド・クラクフ大会も、日本から多くの方々のご参加を期待しております。前回のモンリオール大会のことは、ニュースレターNo. 70に松木繁先生と片山宗紀先生の詳しいご報告がありますので、そちらをご覧ください。

国際交流委員会委員長への就任に際し、国際大会のご案内も併せてさせていただきました。学会員の方々、新たに構成された委員の方々のご協力もいただきながら、本学会の国際交流の活性化に微力ながら尽力できればと考えております。どうぞよろしくお願いたします。

《研究委員会》

催眠研究の活性化を願って

委員長 松木 繁 (花園大学)

この度、学会の研究委員長を拝命しました松木繁です。これまで国際交流委員長を行い自身の、国際催眠学会での発表や会員の参加を促すべく活動を行ってきましたが、今期の役員会では研究委員会を任されました。よろしくお願ひ致します。

研究委員会は、静岡大学 笠井仁先生、駒澤大学 鈴木常元先生、愛知医科大学 水谷みゆき先生、横浜市こころの健康相談センター 片山宗紀先生といった催眠研究に実績をお持ちの先生方に協力を頂き、催眠研究の活性化に向けて尽力したいと考えています。

私は臨床畑の人間ですので、催眠療法の効果研究については多少なりとも活動ができるかと思えます。日々の臨床実践とその効果研究を架橋する役目を果たし、エビデンスを重視した催眠研究への支援などに協力したいと考えています。これが今期の研究委員会の第1の目標です。第2目標としては、催眠研究の基礎研究、特に、脳科学研究との接点を見出し研究を深めたいと考えています。個人的興味で言うと、先の学会シンポジウムでも提案させて頂いたトラウマ治療における催眠カタレプシーの臨床利用と脳科学的な観点からの効果研究などが目指せると良いなと考えています。脳科学研究をされている先生方の協力を得たいと考えていますので、会員の先生方でご協力頂ける方がおられましたらお声かけ頂けると幸甚です。また、効果的な催眠療法における患者（被験者）要因と治療者（催眠者）要因についても解明すべき点が多いように考えています。この点での研究が第3の目標です。

今、世界的な動きを見ると催眠研究は催眠臨床家と催眠研究者の協働が盛んに行われていますので、本学会においてもこうした協働が果たせると良いなと考えています。また、日本臨床催眠学会との共同研究が果たせることでさらなる発展的な研究も可能になるかと考えていますので、両学会の協体制の構築にも尽力したいと考えています。

最後になりますが、本学会では催眠研究への研究助成制度が設けられています。残念ながら、これまで活用されたことがありませんので、是非、皆様方の利用をお願ひ致します。学会HPに手続き等は掲載されていますのでご覧下さい。よろしくお願ひ致します。

《資格認定委員会》

資格の普及

委員長 鈴木義也 (東洋学園大学)

資格認定委員会を担当させていただくことになりました。よろしくお願ひします。

資格認定委員会は資格申請を審査し認定するのが仕事です。しかし、実際にやってみて幾つか問題や課題があることがわかりました。資格更新がなされていないこと、指導催眠士の受験基準が暫定保留のままであること、資格申請がほとんどなく会員の関心が向いていない（向かわせることができていない）こと、資格が学会の活性化に役立っていないことなどです。つまり、会員のための資格として運用的にも構造的にもあまり活発ではなく機能していない感触が拭えません。

前任者から引き継いだ使命としては、この資格を何とかしようというものでした。そこで参考にしたのは米国の催眠の資格、日本の医学会や心理学会の資格の動向です。それらの知見を広く会員の方と共有するために、前回の第66回大会において資格のシンポジウムを開きました。本学会の資格も他の学会と同様により広く会員に普及することが必要だと感じました。

本学会の資格は医師、臨床心理士、公認心理師などと並ぶ基礎資格ではなく、その上に位置する専門性に特化した上位資格です。けれども、高度とはいえ、それはF1ドライバーだけが手にするトロフィーのような最終到達物ではなく、一般人（基礎資格保持者）が市街を走る（臨床行為）ための（催眠の）運転免許のような参加資格くらいに設定すべきでしょう。EMDRのように多くの会員の方が現場でこの資格を掲げて仕事するメリットが生まれるようにしたいものです。また、会員への普及を図ることで本学会も、ひいては催眠というものも普及・発展するのではないのでしょうか。

本学会は資格を発行することを目的に成立したわけではありません。しかしながら、素人から専門職に至るまで催眠の野放図な乱用の現状を目の当たりにすると、質の保証された基準（資格）を普及させることで、良貨が悪貨を駆逐して、患者や利用者に安定した催眠の治療を提供できるのではないかと考えています。催眠を市民の福利のために供するのにも本学会の使命ではないでしょうか。

以上のような目論見で資格の改定に取り組んでおりますが、会員の皆様の賛同なくしては成し得ないことなので議論と協力を経ていこうと思います。ご意見やご提案は遠慮なくお寄せください。

《会則改訂委員会》 委員長就任にあたって

委員長 深沢孝之（心理臨床オフィス・ルーエ）

2020年度より、会則改訂委員会の委員長に就任した深沢と申します。会員の皆様には、おそらく「初めまして」の方が大半だと思います。どうぞよろしく願いたします。

この会則改訂委員会は、理事会における通常の委員会ではなく、会則第16条に基づく臨時の委員会に相当するもので、飯森理事長のご推挙により私が就任することになりました。

歴史ある本学会は、数々の偉大な先生方による素晴らしい業績を積み重ねてきた「名門」と私は感じております。ただ歴史があるだけに、現行の会則は作られてからかなりの時が経っており、現在の時代的、学問的趨勢に合わせた修正や変更が必要ではないかという飯森理事長並びに理事会の先生方の問題意識により、本委員会が設置されたと私は認識しています。

会則は、学会運営の屋台骨であり、憲法に相当するものですので、その検討には慎重さが要求されると思います。

私は、これまで本学会員としての目立った活動歴はなく、心理臨床の実践歴は約30年と長いものの、催眠まだ初学者レベルですので、なぜ私が就任を求められたのか、はなはだ不思議ではあります。初参加は2004年の立命館大学の大会の時だったと記憶していますが、その後何年かに一度、思い出したように全国各地で開かれる大会に物見遊山がてらに参加させていただいて、「あ、あの先生がいる」と遠くからミーハー的に眺めていたり、催眠の研修会で「こんなことができるんだ」と素朴に驚いたり、楽しんだりして臨床現場で多少実践していた程度でした。おそらく私は、児童相談所等で長く福祉行政に携わっていた経歴が、理事の先生方に知られたことが、今回の就任と関係しているのではないかと推察しています。そのような私がはたして、大切な会則に触れて良いのか個人的には不安ではありますが、学会へ貢献をしたいという気持ちはありますので、この機会に励まさせていただきたいと思います。

まずは現行の会則全体を検討し、課題を抽出し、改定案を提案させていただくことになると思います。拙速に行わず、会員、理事会の皆様のご意見を頂戴しながら進めていきたいと思っております。ご意見やご提案があれば、ぜひお寄せいただきたいと思います。

よろしく願いたします。

《事務局》 事務局の抱負

事務局幹事 桜井憲児朗
(ダイヤル・サービス株式会社)

事務局の抱負は端的に言えば、学会を魅力的にするために考えて動くことです。会員数は400名をどのようにすれば達成できるのか。特別研修会では実施ごとにどのようにして100万円の黒字を出すのか。ZoomやTeamsといったコミュニケーションツールをどのようにして活かしていくのか。滞りない学会活動を内外にどのように表現していくのか。このように学会を魅力的にする課題は山積みです。

伝統と革新は反する性質を持つかもしれませんが、変化の弁証法はそうした反する2つの命題の対立を止揚して統合していくことです。臨床心理学や精神医学の世界においても、古くはジャネが重視していた解離と統合が、また脚光を浴びているのは、こうした原理が人間の心の本質を表しているからかもしれません。そうした臨床心理学的、精神医学的な本質をどのようにして整理していくのか、これは実証科学を超えた意見の一致としてのエビデンスである、デカルトの明証性やフッサールの本質観取が関与するところでしょう。そうした意味において、複雑性PTSD等の重症例を含む心的外傷治療において、段階的治療といった方法論が実証科学の上に、意見の一致としてのエビデンスとして構築されたことにとっても可能性を感じています。

このような流れの中で、催眠は優れた方法論を持っていることが分かります。解離を誘発し、治療暗示を与え新たな何かを生成統合する。ミルトン・エリクソンは、意識に統合する前に、まずトランス状態の中で何かを喚起、生成、あるいは達成してから、それを徐々に意識に統合していくという本当に繊細な治療を施していたことで知られています。こうした優れた方法論をどのように継承し、伝えていくのか、こうしたことも学会や臨床催眠実践の今後の大きな課題です。

先日逝去された日本における催眠の大先生たちの仕事に残念ながら私は直接触れる機会がありませんでした。これらの先生を始めとする、日本の催眠研究実践の伝統の中に、大きな可能性が含まれています。一方で、特別研修会で大谷彰先生やレムケ先生が紹介してくれているような最新の催眠知見は革新性を備えています。こうした命題を取り出しながら、それを止揚して絶えず変化の弁証法を機能させること。これが学会を魅力的にすることや活発化には必須と考えます。

第67回大会のお知らせ

2021年度学術大会は、立命館大学が担当させていただくことになりました。今年度は、なんとか対面での開催ができないものかと模索しておりましたが、COVID-19の猛威が収まらない中、前年度に引き続きオンライン開催する運びとなりました。日程は以下のとおりとなります。

2022年2月18日（金）から20日（日）までの3日間

大会の詳細は近日中にご案内する予定です。直接皆様にお目にかかることができないのは大変残念でございますが、オンラインの良さを活かした実りある大会にしたいと思っております。万障お繰り合わせの上、ご参加くださいますよう、お願い申し上げます。皆様のご参加を、心よりお待ちしております。

大会長 福原浩之（立命館大学）
大会事務局 加納友子（立命館大学）



////// 編集後記 //////////////////////////////////////

コロナ禍での2度目の秋を迎えようとしています。学会の活動も模索しながら、一定の制約の中での活動を続ける術を見出し始めている感じがしています。学会の研修会については、対面で行うのは難しく、オンラインでの開催が続くようです。以前は定期的に行われていた学会以外の催眠の研修会は、なかなか復活することが難しいようで、そのことが心さみしい限りです。催眠仲間とお互いに催眠誘導したり、されたり、そのあとの懇親会で催眠談義をしたり。そんな当たり前の楽しい日常が戻ってくることを願ってやみません。（井上忠典）

////////////////////////////////////
